UWC NEWS

No.51

June 2025

発行：公益社団法人 ユナイテッド・ワールド・カレッジ日本協会

本 2025 年度、日本協会からの派遣が開始するタンザニア校。雄大な自然に囲まれたキャンパスには、環境問題に意識の高い生徒が多い。

◆ CONTENTS ◆

巻頭言 ---------- 3
2025 年度派遣生名簿 ---------- 4
2024 年卒業生の声 ---------- 5
2024 年度 日本協会の活動--------- 21
特別寄稿---------- 22
～ＵＷＣ卒業生便り～
横山　恵利香　（イギリス校 2013 年卒）
高野　聖也　　（カナダ校　 2015 年卒）
ＵＷＣ派遣生の推移、ＵＷＣ卒業生の進学先 ----------23
ＵＷＣ日本協会会員企業、最近の動向 ----------24

UWC／UWC日本協会について

UWC（ユナイテッド・ワールド・カレッジ、本部：ロンドン）は、世界 150 カ国以上から選抜された高校生を受け入れ、教育を通じて国際感覚豊かな人材を養成することを目的とする国際的な民間教育機関です。現在までに、イギリス、カナダ、イタリア、アメリカ、香港、インド、ノルウェー、オランダ、ドイツ、日本、タンザニア等、18 の国・地域にカレッジ（高校）が開校されています。

わが国でも、UWCプロジェクトの趣旨に賛同して、経団連の協力のもとに、1972 年9月に「UWC国内委員会」が設立され、同委員会は、1975 年2月に社団法人格を取得して「社団法人ユナイテッド・ワールド・カレッジ（UWC）日本協会」に改組されました。2012 年4月1日には、公益社団法人に移行し、UWCのカレッジに派遣される奨学生の選考、奨学生に対する奨学金の支給、UWC事業の日本への紹介等の事業を行っています。

巻頭言

「変化の時代に、自ら道を切り拓く力を」

UWC日本協会会長（アサヒグループホールディングス会長）
小路　明善（こうじ　あきよし）

私はアサヒグループにおいて長年、人材育成に携わってまいりました。その過程で確信しているのは、「人の成長」こそが組織や社会を支える最も重要な基盤であるということです。

2025 年の今、私たちは生成ＡＩの急速な進展、気候変動の深刻化、地経学的リスクの高まりなど、かつてないスピードとスケールで世界が変化する時代に生きています。こうした環境の中で求められるのは、世界全体を俯瞰し、国内外の多様なバックグラウンドを持つ人たちと協働しながら、自ら道を切り拓くことができる人材です。

自らの「当たり前」を問い直し、世界の多様な価値観や背景を自分ごととして受け止める、そうした思考の柔軟さと広さが、社会や経済を変革する鍵になると感じています。

グローバルに活躍するには、多文化に対する深い理解と、異なる価値観を持つ人々と信頼関係を築く力が不可欠です。UWCでの生活は、そうした力を育む絶好の場です。世界各国から集う仲間と寝食を共にし、ぶつかり、学び合う日々は、視野を広げるだけでなく、挑戦する勇気や、違いを乗り越えるための対話力を磨くことにもつながるでしょう。

多様な価値観に触れる中で、戸惑いや葛藤を覚えることもあると思います。しかし、それらは自分を大きく成長させる貴重な機会です。失敗を恐れず挑戦し、その経験から学び続けることが、将来の大きな成果に必ずつながります。

皆さんには、UWCでの学びを通じて、多様性を理解する力と、困難に向き合い自ら道を切り拓くマインドをぜひ育んでいただきたいと思います。それが、未来の社会を支える力となるはずです。

また、日本協会では、高校生にUWCでの貴重な学びの経験を積んでいただけるよう、多くの企業からのご支援を得て、奨学金を設けています。企業の皆様には、前途有望な生徒が少しでも多くUWCで学べるチャンスを掴めるよう、ご支援をいただきたく思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

◆　2025 年度ＵＷＣ派遣生名簿　◆

UWC Atlantic（イギリス校）

遠山　　楓　　新潟県立長岡高等学校

UWC Adriatic（イタリア校）

大石　　紗也　　フェリス女学院高等学校

佐々木 柚榎　　大阪府立北野高等学校

UWC-USA（アメリカ校）

金田　あおい　　品川女子学院

鴨谷　惟名世　　兵庫県立長田高等学校

Li Po Chun UWC of Hong Kong（香港校）

線　　羽琉　　開成高等学校

UWC Red Cross Nordic（ノルウェー校）

藤城　陽人　　広尾学園小石川高等学校

UWC Mahindra College（インド校）

岩田　叶　　ドルトン東京学園中等部・高等部

UWC Maastricht（オランダ校）

利光　右伊　　大分東明高等学校

黒澤　咲希　　茨城県立並木中等教育 学校

UWC Robert Bosch College（ドイツ校）

竹内　カテリナ朝子ゴッタルド　　渋谷教育学園渋谷高等学校

UWC ISAK Japan（日本校）

サマビル　真彩　　フェリス女学院高等学校

UWC East Africa（タンザニア校）

谷口カランジャ江真　　福岡県立筑紫丘高等学校

＊個人情報につき、お取扱いには充分ご注意願います。

一次選考受験人数　（人）

	国立	公立	私立	計
男子	1	6	11	18
女子	4	20	26	50
計	5	26	37	68

二次選考受験人数　（人）

	国立	公立	私立	計
男子	1	4	7	12
女子	2	12	10	24
計	3	16	17	36

最終派遣人数　（人）

男子	5
女子	8
計	13

◆ 2024 年 卒業生(2022 年度生)の声 ◆

UWC Atlantic（イギリス校）

私の見つけた多様性

山上　万葉

150 以上の国と地域からなるイギリス校のコミュニティの多様性には、伝統衣装や音楽、言語など目に見える分かりやすいものと、生活を共にして初めて知る個人の価値観や宗教など目に見えないものがあることを実感した2年間でした。

この2年間を経て私は今こう思います。結局みんな人間なんだな、と。

出身国や宗教、価値観を問わず、誰でも共感されたり愛されたら嬉しく感じ、心無いことや否定的なことを言われると悲しくなる。当たり前のことですが、「多様性」、「文化の違い」は時として思考停止を引き起こしかねません。

私自身も仲良くなったアフガニスタン出身の友人とは宗教による価値観の違いで衝突することがあるたび、「文化や宗教が違うから理解できなくてもしょうがない」と自分に言い聞かせていました。

しかし、ある時死について話す機会がありました。友人の信仰する宗教の死後の世界は私が考えるものとは全く異なり理解に苦しみましたが、友人は宗教的背景を説明するのではなく、なぜ自分がその世界を信じているのかを情熱的に語ってくれました。そこで、自分が友人を個人としてではなく、宗教のフィルターを通して理解しようとしていることに気がつきました。その会話以降は何か理解できない違いがあるたび、「文化や国が違うから分かり合えなくてしょうがない」という理由に頼らず、「どうしてこの人はそう考えるのだろう」「その発想の背景にはどのような考えがあるのか」と、その「人」について知ろうという努力を重ね、違いを尊重することができました。自分との違いがあっても結局は同じ人間なのだから分かり合えるところは必ずあるという気づきは数多くのかけがいのない友人との出会いや、新しいことへの挑戦の機会をもたらしてくれました。

海難救助の課外活動

イギリス校での2年間は私を一生支えてくれるであろう友人や経験を与えてくれました。UWCでの気づきを胸に、国や宗教というカテゴリーに左右されることなく同じ人間としてこれからの出会いを大切にしていきます。

この2年間ご支援いただいた全ての皆様に感謝申し上げます。

国際人とはなにか

中谷　栞

I became Japanese here.

卒業アルバムでイギリス校での2年間を総括して自然とそんな言葉が浮かんだ。

「国際人」になりたいと思い私はイギリス校に留学した。世界の人と知り合い、様々な出来事をニュースや本の中の話ではなく自分事として見られるようになりたかった。

ウェールズの朝焼け

2年経ち私はイギリス校で日本人になったと感じる。世界の人と触れ合い違いを受容することは、日本人としての自分を客観視するプロセスでもあった。日本で育ったことで形作られた思考や行動の癖を改めて自分の中で俯瞰視することで、私という個人の上に日本人という枠が被せられるような息苦しさを感じたこともあった。しかしそれが国際人になるということなのだと私は学んだ。「国際人」という生き方があるのではなく、自分を含む誰しもが異なる背景とそれに伴う価値観を持つことを理解し、配慮したうえで世界中の人と関わっていく姿勢こそが国際社会で生きるということなのだとUWCでの2年間が私に教えてくれた。

新しい環境に再び移り、ウェールズでの日々が思い出になっていく中でウェールズでの日々も今では自分のアイデンティティを強く形づけていると感じる。ウェールズの朝焼けの美しさ、日々の穏やかさ、城のダイニングホールで香港人の親友と政治や歴史について軽口を言い合った数え切れないほどの夕食、中国人やドイツ人と世界史を深夜まで勉強した夜。それらの全てもまた自分の思考や行動に影響を与えているとイギリス校から離れて改めて実感する今、私はイギリス校での2年をこう振り返る。

I became Japanese here with a bit of Welsh taste.

UWC day でジャマイカ人のルームメイトと

*　*　*　*　*

居場所

八木　涼寧

UWCでの日々は、未知との出会いの連続だ。だからこそ、安心できる居場所を見つけることには、大きな意味があった。

いつでも意見が求められる授業、食堂での大人数での会話、金曜日のパーティー。

自分にも他人にもオープンな人が集まるコミュニティ、多様なセクシュアリティ、ニュースで報じられている難民キャンプや、秘境とされるような地球の裏側で育った友達。全てが圧倒的に新しかった。憧れていたはずのそんな環境に打ちのめされ、私は毎日のように泣いていた。日本での 16 年間、自分を包み込んでくれる家族や友人に恵まれていた私にとってそれは、当時つけていた日記の言葉を借りると、「異常事態」だった。自分はなぜここに居るんだろう、と考えることもあった。

それでも、気づくとイギリス校は私の居場所になっていた。何か劇的な変化のきっかけがあったわけではない。ただ、日々を必死に生きているうちに、頭を空っぽにして取るに足らない話ができる友達と英語力が身についていた。何より、私は毎日幸せだった。様々な形の「多様性」が、当たり前に存在する日常となり、構えることなく接することができるようになったからだと思う。

ルームメイトたちと

個性的で情熱に溢れた同級生たちに囲まれ、ともすれば自分を見失いそうになるUWCという場所で私なりの”comfort zone”を見つけた経験は大きな自信となり、次の場所に踏み出していく勇気をくれた。これからの人生でも、常に新しい場所へと歩み続けたいと思う。

*　*　*　*　*

コンフォートゾーンからの一歩目

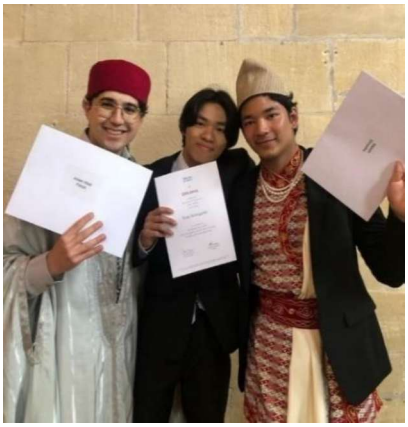
西口　裕朗

「コンフォートゾーンから抜け出す。」 UWCでの恩師がよくおっしゃっていた言葉だ。つまり、自分の居心地の良い場所から踏み出さないと成長できないということだ。振り返れば、UWCはまさに私のコンフォートゾーンを大きく越えた環境だった。慣れない寮生活や英語での授業に戸惑い、孤独や劣等感に押しつぶされそうな日もあった。

そんな中、UWCにも慣れてきた2学期、私は全校の前で「ブルーバード」を歌っていた。世界でも有名な日本のアニソンだ。「飛翔いたら」と歌いだした瞬間、歓声と声援が聞こえた。あの瞬間、私は確かに一歩目を踏み出し、まったく新しい自分と出会っていた。忘れられない経験だ。

2年間、私は何度も新しい挑戦に向かって一歩目を踏み出し、自分を更新し続けてきた。そして、気づけばUWCは、私にとってかけがえのない成長の場へと変わっていた。UWCで学んだこの信念は、今後の人生で直面するあらゆる挑戦に立ち向かう力になると確信している。

また、世界中から集まった友人たちのことを語らずにはいられない。卒業式の2週間前、彼らに誘われて学校前に広がるシーフロント（海辺）へ行った。ウェールズには珍しい快晴の下、音楽をかけながら寝そべり、冗談を言って笑い合った。彼らと家族のようになれた嬉しさ、心地よさ、そして別れの寂しさが、様々な感情となって胸に湧き上がった。卒業した今でも、くだらないメッセージを送り合える彼らは、私にとって一生の財産だ。



卒業式

最後に、この貴重な機会をくださった全ての皆さまに、心より感謝申し上げます。

Pearson College UWC（カナダ校）

今を全力で生きる

西川　舞

”UWCってどうだったの！？どんな大きな学びがあったの？”

よく聞かれる質問である。この答えにはいつも苦戦した。生徒だった頃はUWCでの日々を振り返る度に常に何かに必死な余裕のない自分の姿が見えていた。本当はキラキラした夢物語のようなものを語ってくれることを相手は期待しているのだろう。しかし私には何を口にしたらいいのかわからなかった。

カヌーで無人島を一週間サバイバルした Project week

UWCは本当に不思議で、そしてどこを探してもない特別なところである。かといって決して完璧でないこの場所で世界中から集まった仲間が一緒になって相手を思いやり支え合うコミュニティを構築しようと切磋琢磨する、そんなあったかい場所だった。大学にきてから気づくUWCの一人一人がそれはそれは魅力的であること。毎日が学びの宝庫だった。実際のその国出身の人々の目を通じて見た世界をキャンパスで見せてくれるのだ。そこには私の知らない、深く、複雑で強い感情の波が押し寄せた世界が広がっていたのだった。

未知の世界との出会いに適応していくことの難しさ。人はそれを貴重な素晴らしい経験と呼ぶだろう。この環境を何よりも切望していたはずなのに、当時の私は混乱とその複雑さとで精神面を削られて行ったことは否めない。自分の弱さと無力さと、そしていかに

自分が世界を知らなすぎるのか、自分の目を逸らしたい側面が鮮明に露呈した。そんな中で聞かれる”UWCどう？自分はどう成長したの？どう変わったの？” という質問に胸をはって答えられる自分はいなくなっていた。

そんな中で唯一絶対に死守してきたものは人との繋がりだった。側から見えるUWC生のキラキラさの奥底では皆夥しい数の苦労と困難を抱えていた。その真実と心に近くで触れることのできるUWCで「支え合う」ということは何よりも大切なものだった。そこにはどこで見ることも経験することもできない、本当の生々しい人と人との密接な心の綾が絡み合う場所であった。人間の泥臭さをいかに受け止め、また輝きをいかに心の底から祝福できるか。人間としての心の豊かさに奥行きが加わった。そして卒業してもなお、莫大な距離という障壁を越えて支え続け合えるかけがえのない仲間、宝物ができた。これがUWCという諦めのきかない環境で「今」を全力で生き続けた私の結果である。

ずっと支えてくれた大好きな同期@卒業式

経験したUWCでのすべての思い出を自分の心の支えとして今後大きな一歩を歩めることの大きな幸せと心強さを噛み締めこれからも全力で生き抜いていく。

このような貴重な経験への切符をくださいました日本協会の方々、そして背中を押してくれた両親、家族への深い感謝を込め、ご報告とさせていただきます。

*　*　*　*　*

未知の世界に自分を見つけること

宮武　岳

2年間の留学生活を振り返ってみると、その記憶は大きく二つに分かれるように思う。一つは、生まれ育った日本とは全く異なる文化に疲弊した記憶。そしてもう一つは、気の合う仲間と日々の何でもないことを楽しんだ記憶だ。

カナダに渡ってすぐの時期は、前者の記憶がほとんどだった。特に空港に降り立った直後は、耳に入ってくる言葉や、目に入るものの全てが新鮮で、何が起こったか 10 分単位の時系列で思い出せるほどだ。入国審査官との辿々しい会話や、仕組みのわからない自販機に刺激を受けつつ、いつかそれらが当たり前になって、自分もカナダ人と同じようにここで快適に暮らせると思っていた。

さまざまな文化に適応する能力をUWCで学べたのは、もちろん僕を取り巻く環境の大きな変化のおかげなのだが、それはすなわち大きなストレスも意味していた。僕は例えば、異なる大陸から集まった人々と共同生活する術を学んだが、そのためには、昼夜問わず楽しそうにはしゃぐ皆の声が聞こえる中で、一人静かに過ごす自分を認めてあげ

なければならなかった。実は人間関係の何たるかを全く知らないような気がして、社交的な自分を演じようとしては失敗した。

だが段々と、偽りない自分のままでも一緒にテーブルを囲んだり、映画を見たりできる仲間を見つけられた。彼らは必ずしも僕と意見が近いわけではなかったが、社交性という面では似通っていた。他人と多くを共有しない人といると、UWCはずっと過ごしやすかった。友人が僕を気にかけてくれる分だけ、僕も自分が負担に感じない範囲で彼らのことを気にかけていれば良かったから。

１週間のカヤック旅行にて

そんな生活に慣れた僕は、国際的なマインドセットを持つ人々に倣おうという当初の目的は忘れ、最初から自分と似た部分を持つ人と会うことが興味の対象になっていた。だから自分がUWCで快適に生活できていることに気づいた時、そのことを素直に喜べなかった。僕の「適応力」は、「自分とは全く異なる、本当の意味で馴染むことのできない世界もある」という諦めの上に成り立っていたからだ。

だが同時に、そうした他者と自分との相違点が、今まで気づかなかった自分の人となりの輪郭をぼんやりと見せてくれた。そして人の性格や意見を、完全に理解することはできなくとも、僕自身の意見と同様に尊重する姿勢を学んだ。それが、友人たちが僕にしてくれたことだったから。UWCで僕にできること、それは他人に同化しようとすることでも、他人の理解を求めることでもなく、他人と違う自分を発見し、発信していくことだった。

未知の世界と接するたびに何かしらに傷つき、何かしらを受容して、自分の視野とアイデンティティそのものを広げてきた2年間でした。このような他にない機会をくださった皆様に感謝してやみません。

UWC Adriatic（イタリア校）

イタリア校ありがとう！

名倉　有希

思えば、寮の目の前に輝くアドリア海も、溶けて手を伝うジェラートも、友人と過ごす時間も、全てが美しくて、それが現実であったのかわからない程遠い夢の中のような2年間だったように感じる。

でも、イタリアにいた時の私は醜いものばかり気になった。

ヴェネチアにて　同級生の真衣と

リーダーシップ？なんですかそれ？それよりまずどうやって食堂で人に話しかけるのか教えてください。私だって図書館に通って、一生懸命に毎日頑張っているのに、あの子はいつランニングに行って、パーティーで人に囲まれて、先生からの信頼も得ているのですか？私、UWCまで来て、時間を無駄にしていますか？

期待と現実とのギャップが大きすぎて、自分の能力を疑い、手から急ぎこぼれ落ちていく時間と労力を、寮のベッドの上で、後悔することしかせず何も行動に移さない自分と過ごすことは苦しかった。

挫折・孤独・恥・・・　日本で普通の高校生だった私には、それらを味わわないで済む未来もあったと思う。それでも、この経験がどれほど自分の財産になることか思い知った今は、UWCを経験しなかった自分を想像することのほうが恐ろしい。是非とも、これからの世代の方々にも、今自分が持っているありったけでイタリア校を、UWCを、体験してほしい。

ご支援くださった全ての方々に、御礼申し上げます。

*　*　*　*　*

自由

高橋　真衣

小さな村の暮らしの、朧げな追憶のかけら。

例えばそれは、問いだったりする。何度反芻しても噛みきれなかったやつ。

特権、過去、文化、愛、傷、信頼、資本主義、多様性。私たちは、いつだってそこに問いを見つけた。あるときはピザを頬張りながら。またあるときは漆黒の海を見つめながら。私たちは対話の中で信念を揺さぶりながら、18 年間信じて疑わなかった世界が崩れ落ちる音を聞いた。正しさも自己も、もう分からなかった。私は弱く脆くなった。それでも私はもがきながら、自身の体温を感じた。

それは、ひとの温もりだったりもする。私が一生愛する人たち。

前提が消滅した世界で、他者との〈わかりあえなさ〉の諦念の波に襲われることもあった。けれど、それを包摂した上で、荒削りの言葉を共に紡いでみたいと思える人に出会

えた。夕日が綺麗だからと海までの坂道を一緒に駆け降りたひと。傷を共有したひと。私に幸せの意味を教えてくれたひと。

大切な人たちと共に少しずつ築き上げた哲学は、今も私のまんなかにある。これからどんなに高尚な知恵を手に入れようと、愚直な18 歳の私たちが信じたものをいつまでも忘れずにいたい。あの日々の清々しい言葉に意味を見出すために、私は、学び続ける。

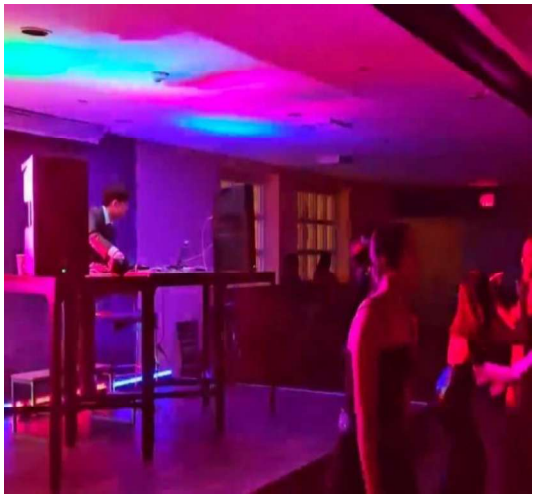
大好きな親友と

UWC-USA（アメリカ校）

新たな視点と可能性の広がり

久津間　大智

陳腐に聞こえるかもしれないが、UWCは僕の価値観を大きく変えてくれた。この2年間で、多様性や他者への理解、挑戦を恐れない姿勢など多くの視点を得ることができた。そして、それは日常の中の何気ないことにも影響を与えている。



Yule Ball で DJ をしている様子

例えば、僕は長い間音楽を作っているのだが、UWCに来る前は K-pop ばかり聞いていた。しかし、学校行事で DJ をさせてもらったことで、R&B や HipHop、カントリーやクラシック、さらには様々な国の伝統音楽にも親しむようになった。そのお陰で、今では自分自身のユニークな曲調や多様なジャンルの音楽にも挑戦して、活動の幅が広がった。

また、友達を通してアメリカや他国の文化を知っていく中で、日本の素晴らしさにも改めて気付かされた。日本食の美味しさや安全性、美容院の技術の高さ、100 円ショップの便利さなど、日本では当たり前と感じていたことの価値を再発見することができた。

少し話が変わるが、英語は、あくまでもコミュニケーションのツールである。しかし、教科のひとつとして学ぶ中で、いつの間にか英語そのものが目的になってしまいがちだと思う。重要なのは、身に付けた英語をどのように活用して自分を成長させていくかという点だろう。例えば、ネットワーキングを広げて多くの人と繋がり、価値観の共有や意見交換

をすることで、英語を単なる言語以上のものとして使いこなすことができる。これも、国際色豊かなUWCで学ぶ醍醐味の一つではないだろうか。

とにかく、UWCで得た経験は、これからの僕の活動において欠かせない原動力となっている。

最後に、このような貴重な経験を支援してくださった全ての皆様、本当にありがとうございました。

Welcome Ceremony

＊　＊　＊　＊　＊

完璧主義を崩してくれた2年間

中里　菜緒

あれから、もう2年半が経とうとしている。19 歳になり、光陰矢の如しという言葉を痛感する。

グランドキャニオンでの 7 日間のバックパッキング

高校2年生の夏、日本の高校を辞め、5時間車を走らせても景色が変わらない大高原が広がるニューメキシコに飛び立った。「コンフォートゾーンの外に出る」という表現では足りない挑戦だった。

0日目、アルバカーキ空港でユートピアへの期待が早くも揺らいだ。周囲の会話についていけず、ダブルパンチで謎の腹痛にも襲われた。それでも、拙い英語を辛抱強く聞いてくれる仲間や、暖かく迎えてくれた2年生や先生、寮母さんに救われた。いつか自分もこの場所を第二の故郷と呼べるだろうかと思いつつ、疲れ果ててシーツも敷かずにベッドで眠りについた。

UWCでの日々は予想外の連続だった。学校の水道が止まり、川で体を洗った。グランドキャニオンで崖から落ちた。授業で質問するだけで体力を消耗し、努力が必ずしも成績に結びつかず、完璧主義が崩れていった。その一方で、深い絆が生まれた。料理中にくだらない話をして火災報知器を鳴らした。家族にもできないような深い話をした。

多様な進路を歩む人々と出会い、未来を追いかけることに必死だった私は、今を謳歌する大切さを学んだ。

もう一度UWCの2年間をやり直す体力はないが、やり残したことも多い。今になってあの場所の特別さを実感している。ニューヨークの大学に通う今でもUWCの仲間とは頻繁に会い、あの経験が今の自分を支えてくれる。この機会をくださった経団連の皆様、家族、友人、先生方に心から感謝します。

Welcome Ceremony にて世界中から集まる友人たち

Li Po Chun UWC of Hong Kong（香港校）

本質を問う

清田　李桃音

食堂へ向かう途中、ケニア人の経済講師、アルフレッドが黒い老犬と歩幅を合わせながらこちらに向かうのが見えた。私が何事もなく挨拶して通り過ぎようとすると、彼は呆れ顔でこう言った。

「Slow down, slow down. 」

日本で潜在的に効率が求められる社会に食らいつくように生きてきた私にとって、「ゆっくり」というのは新しい概念だった。人生の余白だと思える時間を最小限に抑えて、目標達成への近道だけを探し、そんな自律した自身を肯定的にすら捉えていたのだ。

卒業式

しかし、80 カ国以上の人々の縛られない人生観に触れるほど、目的も考えずに効率を絶対化する自分の愚かさを省みることとなる。ブラジル人の友人には、Academic block にこもって勉強する度に、「これだから日本人は過労死するんだ」と冷眼視された。

買い物の時間がもったいないと空腹を紛らわしていると、マダガスカル人の友人が、自分の国では食べ物を分けて幸福を共有する文化があるからと、なけなしのお金で買ったチョコレートをありったけ分け与えてくれた。

心から尊敬できる友人と、物事の本質を見つめる姿勢を築かせてくれたUWC生活は紛れもなく今後の人生の礎となるだろう。支えてくれた全ての人への感謝を忘れず、社会に還元できるよう精進したい。

＊　＊　＊　＊　＊

想定以上の学び

新井　詩乃

UWCは私に全く新しい価値観を与えてくれました。

新しい環境に挑戦するのが好きな私は生まれ育った日本を離れ、一人飛び立つ不安より高揚感が勝っていました。

ところが、カレッジ到着直後から様々な困難に立ち向かうことになりました。そんななか、拙い英語で話す私を頑張って理解しようとしてくれた友達、英語での勉強に苦戦していた私に一生懸命英語を教えてくれたルームメイト、ホームシックになっていた時に日本のお菓子を買ってきてくれた先輩、私はUWCで沢山の人たちに助けられました。周りで支えてくれた人たちのおかげで途中で挫けずに成長することができました。

この経験から学んだことは、コミュニケーションの大切さです。会話をすることで初めて、その人の持つバックグラウンドや性格を理解することができ、互いに助け合えるようになります。当たり前のことのようで今まで実感していなかったことを、私はUWCで初めて実感し、こうして言葉にできるようになりました。

これは、全く異なる文化、背景を持った生徒が集まるために、コミュニケーションをとることが必要不可欠となるUWCだからこそ体験できたことだと感じています。

この経験は私を大きく変えました。内向的だった私が新しい人との出会いを楽しめるようになり、自分の見える世界が大きく広がりました。

UWC Red Cross Nordic（ノルウェー校）

つながりを力に変えて

水谷　優来

UWC Day

UWCでの2年間、各国から集まった仲間たちから日々刺激を受け、自分が目指す人物像や人生のあり方について考え続けた。ホットチョコレート片手に友人の部屋で交わす何気ない会話や月明かりがきらめくフィヨルドを眺めながらの語らい……すべてが学びの場だった。ゆっくりと時間をかけて築いた信頼関係のもと、将来の夢や紛争、宗教、セクシュアリティ、人種差別、環境問題などあらゆるテーマについて語り合った。そうして過ごすうちに、仲間たちが大切にしている文化や価値観が自然と自分の中に染み込んでいった。

それらは私の意識に変化をもたらした。2023 年 10 月7日以降、ノルウェー校の空気は一変し、パレスチナ人の親友の顔は次第に曇っていった。レバノン南部に故郷がある彼女は、家族や友人の安否が気になって勉強に集中できないという。冗談で場を和ませるのが上手で、決して弱音を吐くことのなかった彼女が、自分の国に対して何もできない無力感に苦しみ、涙を流すようになった。

パレスチナの親友と

そんな中、近くの町 Førde でパレスチナの自由を求める大規模なデモが行われることになった。ただ友人の力になりたい一心で私はプラカードを持ち、声を上げた。「こんなにもこの問題について考えてくれる人が、ノルウェーの小さな町にいる。それだけで嬉しいの。」と久しぶりに見せた明るい顔で友人は微笑んだ。友人との繋がりを通して、世界のどこかの問題が自分にとっても大切な問題に変わり、自分に何ができるか深く考えるようになった。

今も議論や悩みに直面したとき、仲間たちならどう考え、行動するだろうかと想いを巡らせることがある。それまでとは異なる角度から社会の出来事を見ている自分にふと気づくとき、2年間苦楽を共にした友人の存在の大きさを実感する。

プレイリストから流れるアフロビーツやアラビア語ラップは、友人の文化が自分にとって大切なものとなっていることをそっと思い出させてくれる。このかけがえのない出会いと貴重な機会をいただいたことに深く感謝し、UWCで培った新たな視点を大切に、これからも歩んでいきたい。

UWC Maastricht（オランダ校）

辛いと言えることの幸せ

仲柴　雄貴

極寒の冬と海

先輩が卒業した5月下旬、長い冬から脱したオランダの初夏の暖かさと静かな「Island*」が、一夜にして寮から半数の生徒が消え、ぽっかりと空いた心を優しく包むようだった。入学し8か月が過ぎたそのころ、友人との仲も深まり、彼らの力強く、底抜けに明るい笑顔に隠された涙にも気づくようになった。戦争や差別、長年の迫害を経験してきた青少年たちの多くのつらさを抱えながらも羽ばたこうとしているその姿はとても美しかった。

ルームメイトと夏休み

UWCの中でも寮内の先生に対する生徒の比が高いオランダ校では生徒たちに多くが委ねられている。この独特な環境が「青少年が作り上げるコミュニティ」を邁進していると私は強く感じた。200 人の未熟な青少年たちは互いに支えあいながら成長をしていた。きっと2年という長い時間と、「ゼロからスタート」といったある意味極限の状態をともに生活し、乗り越えた経験があるからこそこれほど力強い絆が結ばれたのだろう。

「辛い」

UWCでの2年間、決して楽しいことばかりではなかった。一人ではここまで成長することはできなかっただろう。だが、どのような困難・苦痛に阻まれようと互いの「辛い」といった声を聞き、支え、そして前に進むことのできたこのコミュニティの一部であることが、私の大きな誇りであり、幸せでもある。

*オランダ校は堀で囲まれているため「島」と愛称される

*　*　*　*　*

幸せと言えることの幸せ

松塚　さくら

卒業式が迫るにつれて、それぞれがUWCでの生活の「終わり」を意識するようになります。

卒業式

Last School Day の夜、友達と公園の芝生の上に円になって座り、互いに感謝を伝え合う時間を取りました。その時に言われた、「さくらと出会えたってことだけで、この2年間がとても価値のあるものになった。」という言葉。私はその瞬間を、みんなの表情を、これ以上ないほどの幸せと溢れてくる涙を、どんな小さなことでも必死に目に焼き付けようとしました。

「今は根っこを張る時期。きれいな桜を咲かせるためには、しっかりした根っこがいるやろ。」UWCでの最初の数か月。私が現実に打ちのめされて泣きながら電話すると、母は必ずこの言葉をかけてくれました。努力の方向が分からなくて、それでも何とか毎日進み続けなければならなかったとき、何時間であろうと電話口で私の話を聞いてくれた母。卒業式に来た母は、私がどれだけ幸せか、私の桜が今どれだけ満開か、少しは感じ取れたでしょうか。

何気ない友達との日常

日本での家族との生活。健康的な和食。始まって間もなかった高校生活。打ち込んでいた部活動。それらすべてと引き換えに、2年前に下した私の決断を、私は今、心の底から誇りに思います。右も左もわからず、持ち前の根性だけを背負ってスタートしたUWCでの生活は、たくさんの不安やもどかしさ、悔しさを経て、夢のように美しいものとなりました。毎日、毎分、毎秒を、こんなに「生きている」と体感した2年間は、今までありません。

UWC Robert Bosch College（ドイツ校）

思いがけず始まった冒険の旅

上野　光喜

　僕の冒険はコロナから始まった。人は暇になると色々なことを考える生き物で僕はそこで「自分は何をしたいのだろう」と人生で初めて問いかけた。そこからはあまり覚えてない、気づいた頃には海外を目指していた。未知の世界に飛び込み、知見を増やしてから人生のことを考えよう、そんな気持ちだった。そんな運命な出会いを求め冒険に出るのであった。

　しかし当時、理解していなかったのは、冒険はポジティブなことだけではなく、今まで立ちはだかることのなかった困難に向き合うなど苦難もあるということだ。そんな苦難に僕は数えられないほど出会った。しかも生活のあらゆる場面が同じ場所にあるUWCの環境ではこのような苦難は一面的ではなく、複雑だった。

　だが、UWCという環境は僕にかけがえのない友人をも与えてくれた。眠い月曜日の朝、河原に座って歓談、テストがダメダメだった日、ちょっとした夕食などいろいろな場面、経験に友人は必ずいた。そして自分が素直でいれる友人がいたからこそ困難は乗り越えられた。言葉が必ず通じるわけでもなく、文化的価値観が同じなわけでもないのにどこの国の誰々ではなく、気づいたら１人の友達としてそばにいてくれた。今は向き合った困難が冒険にあったからこそ自分は大きく成長できたのだと思う。

ホーリーでのセレブレーション

友達と食堂へ！

　一段落した今、まだなりたい自分というものに出会えてない。だからまた冒険に出ようと思う。そんな勇気と可能性をUWCは僕にくれた。

　最後にこの冒険、そしてその先を可能できるようサポートしてくださった皆様にこの場をお借りして心の底から感謝します。

UWC ISAK Japan （日本校）

なにかを生きた

宗宮 祐玄

UWCの2年間は、困難の連続だった。異色な環境に慣れることができず、周りとは価値観が合わず、しまいにはルームメイトと衝突して部屋を追い出された。失敗が続き、コミュニティの中で自分の役割を見つけられなくなり、虚無感に苦しんだ。

特に、成績は深刻だった。ＩＢのカリキュラムは、自分のキャパシティを軽く超えていた。授業ペースについていくためには、多くの時間を費やして量をこなす必要があった。正直に言えば、遅れた分の復習をするために、いくつかのイベントは犠牲となった。それでも、先輩や同級生に助けられ、少しずつ知識を身につけられるようになっていった。ただ、周りの仲間が、“UWCらしさ” を精一杯に謳歌するなか、自分は学業に時間を割いていても良いのだろうか… と不安を抱いた。

Science Day で鳥の巣箱を作る筆者ら

そういう不安に駆られ、2年目からは後輩に化学や数学を教えはじめた。それが軌道にのったとき、私はやっと自身の役割を見つけられ、自分の責任を少しだけ果たせた気がした。

振り返れば、UWCを真に “楽しい” と思えた日は一日もなかったかもしれない。だけど、後悔はしていない。失敗続きで悪戦苦闘した日々も、足掻きながら学び続けた分だけ成長できたと確信している。そして、この拙文を読んでいる読者にもUWCの困難さを経験してほしい。

最後に、私の2年間の生活を支えていただいた、日本協会をはじめとするすべての方々に深く感謝を申し上げます。ありがとうございました。

◆2024 年度 UWC日本協会の活動◆

2024 年

【５月】

17 日：第 33 回理事会

26 日：2024 年度派遣生オンライン・オリエンテーション

【６月】

19 日：第 13 回通常総会

2024 年度派遣生激励会、カレッジ別オリエンテーション

【７月】

12 日～14 日：卒業生会主催

2024 年度派遣生オリエンテーション

・キャンプ

【９月】

22 日：2025 年度派遣生募集オンライン説明会（230 世帯参加）

【10 月】

１日：第 34 回臨時理事会

【12 月】

15 日：2025 年度派遣生一次選考（筆記）＜68 名受験＞

2025 年

【２月】

10 日：2025 年度派遣生二次選考（面接・グループディスカッション）

＜36 名受験＞

【３月】

11 日：第 35 回理事会

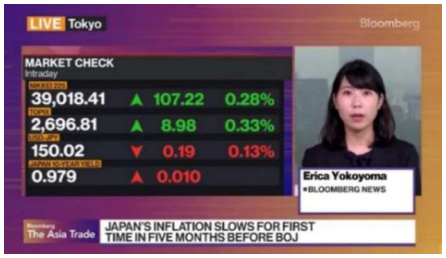
特別寄稿 『UWCでの経験が現在のキャリアにどう結びついているか』

ーUWC卒業生よりー

➢ 「混沌を読み解き、伝える」 横山　恵利香 （イギリス校　2013 年卒）

京都大学法学部卒業後、経団連産業リーダー人材育成奨学生としてオックスフォード大学社会学部修士課程に進学。現在はブルームバーグニュース東京支局にて政治経済部の記者として勤務。

政治経済部記者として私が最も刺激を受ける仕事は G20 の同行取材だ。先進国と新興国、対立する価値観や利害を持つ 20 カ国のリーダーが集い、自由貿易や気候変動など多岐にわたるテーマを議論する。主張は真っ向からぶつかることもあるが、各国はわずかな接点を探り合意形成を模索する。私の役割はその過程を現場で見つめ伝えることだ。難しいが、大きなやりがいを感じる。



出典：ブルームバーグ

会場に掲げられた色とりどりの国旗を見るたび、UWCでの日々がよみがえる。異なる文化に戸惑い友人と理解し合えないこともあったが、一方で「違い」を力に変える喜びや対話の可能性も学んだ。あの葛藤と発見が、今も報道の現場に現れている。

今直面する国際社会の混沌は、10 年前ほどに私がUWCで体験したものの縮図だ。出来事は善悪や勝敗で語れず、複数の論理や歴史が絡む現実を俯瞰する視点が必要だ。対立や混乱の裏にある構造を読者に伝えることが私の使命だと感じる。

➢ 「正解のない世界へようこそ」 高野　聖也 （カナダ校　2015 年卒）

UWC卒業後、慶應義塾大学法学部、東京大学法科大学院に進学し 2023 年に司法修習を修了。
現在はアンダーソン・毛利・友常法律事務所外国法共同事業で、日本法のアソシエイト弁護士として勤務。

先輩弁護士とともに

「正解のない世界へようこそ」。

司法修習の初日、教官から言われたこの言葉は、物事を多面的に捉える大切さを教えてくれたかつてのUWCでの経験を想起させた。

人種・宗教・文化・価値観・出身などバックグラウンドの異なる学生が集まる UWC での共同生活では、もちろん意見や主張が食い違う場面がある。お互いが自らを正しいと信じているからこそ衝突するのだが、当人を取り巻く状況に目を向けることが解決の一助になることが多かったように思う。

また、想像力を働かせることもとても重要であった。紛争地域出身の友人から生活環境や紛争の現状を聞く機会があったのだが、紛争が起きているという事実を知っているつもりでも、実体験として語られる壮絶さに衝撃を受けたことを覚えている。

濃い 2 年間の共同生活を通して、相手を取りまく状況を想像し、物事を多面的に捉えることがいかに難しいものであるかということを学んだ。

現在、弁護士として法律業務に携わっているが、法律の適用の対象となるのは生の事実であり、常に変化する。最適解を導き出すためには、物事を多面的に捉え、立場が変われば正解も変わり得ることを意識しなければならないと心に留め、日々の業務に向き合っている。そんなUWCでの経験を通して得た考えは、今後も変わることはないだろうと思う。

Internal

◆UWC派遣生の推移◆

（1972 年度～2025 年度）

2025 年6月現在

カレッジ / 年度	イギリス		カナダ		シンガポール		イタリア		アメリカ		香港		ノルウェー		インド		オランダ		コスタリカ		ドイツ		アルメニア		中国		日本		タンザニア		合計
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
1972～2014	88	120	44	73	13	19	16	35	22	33	11	9	4	6	4	17		3	1			1									519
15	1	3	1	1			1	1	2	1	-	1	-	1	1	1	-	1	1	-	-	1	1	-							19
16	2	2	-	2			1	1	1	1	-	2	-	1	1	1	-	2	1	2	1	-	1	1	1	-					24
17	3	1	-	2			1	1	-	2	1	2	-	1	3	-	-	1	3	1	-	1	1	1	1	1					27
18	2	1	1	1			1	1	1	2	1	1			-	2	-	1	3	-	-	1	1	2	1	1					24
19	-	3	1	1			-	2	1	1	-	2	-	1			1	1	-	2	-	1	1	1	-	2					21
20	2	2	1	1			1	1	1	2	1	1	-	1			1	-			1	-	1	2			-	1			20
21	-	3	-	2			-	2	1	2	-	2	-	1			-	2			-	1					-	1			17
22	1	3	1	1			-	2	1	1	-	2	-	1			1	1			1	-					1	-			17
23	1	2	-	2			1	1	-	2	-	1	-	1			-	2			1	-					-	1			15
24	-	2	-	1			1	1	-	1	-	2	1	-	-	1	-	2			-	1					-	1			14
25	1	-	-	-			-	2	1	1	1	-	1	-	-	1	1	1			-	1					-	1		1	13
合計	101	142	49	87	13	19	23	50	31	49	15	25	6	14	9	23	4	17	9	5	4	8	6	7	3	4	1	5		1	730

◆UWC卒業生の進学実績◆

（2014 年～2022 年にUWCを卒業した派遣生の進路のうち、主なもの）

【海外大学】

●アメリカ

Amherst College、Bates College、Brown University、Colby College、College of the Atlantic、Colorado College、Columbia University、Earlham College、Grinnell College、Johns Hopkins University、Kalamazoo College、Lake Forest College、Leiden University、Lewis & Clark College、Macalester College、Methodist University、Middlebury College、Minerva Schools at KGI、New York University、Northwestern University、Princeton University、San Diego State University、Smith College、St. John's College、St. Lawrence University、St. Olaf College、The University of Oklahoma、UC San Diego、University of Pennsylvania、University of Rochester、Wesleyan University、Williams College、Yale University

●イギリス

Aberystwyth University、Imperial College London (ICL)、University of Cambridge、University College London (UCL)、Wesleyan University

●その他

Amsterdam University College（オランダ）、、Bard College Berlin（ドイツ）、Catholic University of Leuven (KU Leuven)（ベルギー）、Delft University of Technology（オランダ）、ESCP Business School（フランス）、IE University（スペイン）、Sciences Po Le Havre Campus（フランス）、The University of New South Wales（オーストラリア）、University of Amsterdam（オランダ）、University of British Columbia（カナダ）、University of Toronto（カナダ）、Politechnika Wrocławska（ポーランド）、Quest University Canada（カナダ）、Yale NUS（シンガポール）、Yale NUS（アラブ首長国連邦）

【国内大学】

大阪大学、岡山大学、京都大学、慶應義塾大学、国際基督教大学、上智大学、筑波大学、東京医科歯科大学、東京大学、東北大学、早稲田大学

公益社団法人 ユナイテッド・ワールド・カレッジ日本協会

会 員 企 業

2025 年 6 月 25 日現在

（敬称略・順不同）

アサヒグループホールディングス	第一三共	富士通
旭化成	第一生命ホールディングス	富士電機
朝日生命保険	大和証券グループ本社	古河機械金属
アステラス製薬	中外製薬	古河電気工業
ADEKA	東京海上日動火災保険	丸紅
安藤・間	東レ	みずほフィナンシャルグループ
伊藤忠商事	日清製粉グループ本社	三井住友海上火災保険
ANAホールディングス	NIPPON EXPRESSホールディングス	三井住友銀行
王子ホールディングス	日本軽金属ホールディングス	三井物産
キッコーマン	日本製鉄	三井不動産
サントリーホールディングス	日本生命保険	三菱ケミカルグループ
島津製作所	日本ゼオン	三菱重工業
清水建設	日本電信電話	三菱商事
住友化学	日本郵船	三菱電機
住友商事	野村ホールディングス	三菱 UFJ フィナンシャル・グループ
住友生命保険	東日本旅客鉄道	横浜ゴム
積水化学工業	日立製作所	
ソニーグループ	富国生命保険	【52社】

《個人会員》 佐藤 輝英（ビーネクスト キャピタル マネジメント ファウンダー・CEO /UWC卒業生）

【支援企業・団体（特別寄付）】 UWC卒業生会

最近の動向

今年度、新たにタンザニア校への派遣を開始します。世界各地のUWC校で学ぶことを考えている生徒の皆さん、乞うご期待、挑戦を待っています。

日本協会では、一人でも多くの日本人高校生がUWCにおける「人生を変える体験」ができるよう、ご支援いただける企業会員や個人の拡大に向けて積極的に活動してまいります。

公益社団法人ユナイテッド・ワールド・カレッジ日本協会

会　　長：小　路　明 善（アサヒグループホールディングス会長）
専務理事：長谷川　知 子（経団連 常務理事）
事務局長：黒　髪　　彩　（経団連 教育・自然保護本部主幹）
事務局　：〒100－8188 東京都千代田区大手町1－3－2
一般社団法人日本経済団体連合会 事務局内
電話：(03)6741-0163　FAX：(03)6741-0351
E-mail：　uwc@keidanren.or.jp
Website：http://www.keidanren.or.jp/japanese/profile/UWC/